

水辺集落における文化的復元力

— 中部タイのアユタヤを事例として —



AK15012 宇多川茉美

Keywords

水辺居住 運河の氾濫 物的関係
社会的関係 再帰性 再生 文化的復元

1. はじめに

1.1 研究背景

かつて、日本を含むアジアでは、水と密接に関わりながら生活する水辺住居が多くみられた。日本では、川の水が生活用水であったため、古くは水辺に沿って生活しており、大量かつ安価で運べることから水運によって物を運んでいた。しかし、戦後の高度経済活動や都市化が進んだこと、水辺の埋立て、水害から逃れるために水辺から離れたことで、水辺の土地の生活文化は失われていった。

これに対して、タイ中部のアユタヤ県においては、川の氾濫に対応しながら、かつての伝統的居住文化を現在も維持し、水辺で暮らしている地域がある。水域と密接に関わりながら生活することで、大きな恩恵を受けることができる反面、雨期に起こる運河の氾濫によって集落には様々な影響が及ぶ。しかし、何らかの手法で水辺との共存を維持し、その場に住み続けている。

1.2 水辺住居

水辺住居の種類は、大きく分けて浮家と高床式住居がある。

浮家は、舟型住居と筏住居に分けられる。舟型住居とは、舟にヴォールト状の屋根をかけ住居としたものであり、刳船、皮船、縫合船の順に発達した。筏住居とは、竹で編んだ筏の上に住宅が建設され、川に係留されている筏住居である。筏は世界的に広く分布し、特に稲作技術を持った水辺の人たちの多くは、筏住居に住んでいた。基礎がなく水に直接浮いているため、どのような水位変化が起きても、住宅は水の変化にしたがって上下できる。

高床式住居は、水上と陸上に建つ2種類のタイプがある。水上の高床式住居は、水の上に固定した住居であり、背の高い柵に固定された床が、湖中に立っている。水上住居の集落の特徴として、水上住居まで陸から栈橋が伸びて、住居相互も栈橋で結ばれているものと、陸から栈橋、家同士を結ぶ栈橋もないため、船が唯一の交通手段となるものがある。陸上住居は、陸の上に固定した住居であるが、水辺の近くに建っているものは水際住居とも言われる。水辺沿いの地盤は柔らかく、基礎構造部材は地中深くまで打設しなければならない。床下の部分だけ

でも7m、上部構造を入れると10m以上の木材が必要であるが、一本柱として使用できるまっすぐな木は少ないため、基礎構造と上部構造を分け、柱材を床板付近で接合することで解決している。

1.3 研究目的

本研究では、水際で生活し、雨期には水上、乾期には陸上となるK村を対象とする。毎年繰り返される川の氾濫に対して事前に準備していることや氾濫後の対応を調査し、なぜ水との共存が可能であるかを明らかにする。建築物や空間だけでなく、社会関係にも注目しながら考察し、日本には存在しない、水と共存する力や川の氾濫後の復旧復興方法について新たな発見をすることを目的とする。

また、K村の南東に位置するP村では、2011年水害の影響で水との共存が失われた。住居、生態環境、コミュニティにおいて、運河を利用して生活から利用しない生活になったことにより、何らかの変化があると考えられる。その変化を調査した上で、運河が村に与える影響を追求したい。

2つの村を対象とすることで、村ごとに異なる再生方法を明らかにする。そして、毎年起こる氾濫の対処方法、2011年の大洪水の対処方法に焦点を当て、再帰性・再生方法を分析し、水辺集落の文化的復元力を明らかにしたい。

本研究では、言葉の定義として、外部から何か力を加えられたとしても元に戻る性質を「再帰性」とし、壊れたモノを完全に元の姿に戻すのではなく、何か新しい変化を加えながら復元することを「再生」とする。

1.4 研究方法

本研究では、2018年8月18日から8月22日の5日間にわたりK村を調査し、8月24日にP村を調査した。

調査した5軒の全世帯において、平面図、断面図および住居周辺の実測、住民へのインタビューを実施した。聞き取り調査では、雨期・乾期の生活、運河の使い方、村人たちの関わり方、復旧復興方法についての質問を中心に行った。

2. 調査地概要

2.1 アユタヤの概要

アユタヤは、首都バンコクより北方約60キロに位置している平原地帯である。面積は、255万km²で、1706の村がある。チャオプラヤー川流域の伝統的な水辺集落が存在する場所の1つで、水辺集落に特徴的な、水田、果樹園、漁業による文化的景観がみられる。

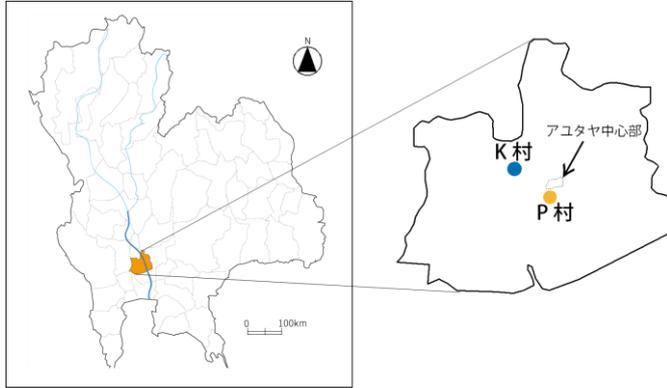


図1 K村、P村の位置

2.2 K村の概要

K村は、アユタヤの都市部より北西約10kmに位置しており、人口は約300人である。運河が存在し、毎年雨期になると洪水の影響がある地域である。母系社会であり土地も家も女性が継承するケースが多く、姉妹の家にそれぞれの夫が入り、1つの敷地の中で複数の世帯が暮らしている。

この村では20年前に大きく生活が変わった。その要因は、新しい道路が作られたこと、水道が整備されたことである。新道ができたことで、交通手段が船から車に変化し、屋敷の向きが変化した。道路が作られる前は、買い物や病院などに行く際は、船を使っていた。

2.3 P村の概要

P村は、アユタヤの都市部から南に3.6km離れており、雨期の洪水で水面下になる氾濫原に位置している。洪水の季節は、水位が80cm～120cmになり米の栽培を助けていた。収穫前の水分を多く含んだ穀物を乾燥させるための、家と田んぼの間にある大きな空き地が、この水田村における特徴である。しかし、2011年の水害の影響で行政により運河がせき止められたことで水位は低下し、洪水が起こらなくなった反面、伝統的なものが失われた。

3. 先行研究の検討

3.1 津波被災と再定住

前田は、津波被災地で再定住が成功した地域は、住宅地規模、地縁に必ずしも規定されない社会関係および住宅敷地所有・利用関係の再編があったことやマイクロクレジットが介在していることを明らかにしている。

3.2 チャオプラヤー川流域の都市と住宅

アジアまち居住研究会は、アユタヤのムスリム地区の

うち1つの村を調査した。その村における居住空間、増改築方法を分析している。

3.3 東日本大震災合同調査報告

東日本大震災合同調査報告書編集委員会は、復旧・復興の考え方として、高所居住や内陸移転が推奨され、仮設住宅や災害公営住宅が作られるとともに、津波対策の強化として多重防御が基本となったことを述べている。

3.4 先行研究を踏まえて

本研究では、水辺集落における特徴的な増改築方法・理由、暮らしの工夫を明らかにする。また、2011年に起きた巨大水害にどのような対応をしたのかを追求する。そして、居住地移転や再定住地ではなく、災害前の居住地だったその場で、以前と変わらない文化やコミュニティを復元することは可能であるのか、可能になる要素は何かを分析する。

4. 居住空間

4.1 住居の構造

調査した5軒の住居は全て伝統的な高床式の木造であったが、一部の柱がRCに変化していたり、屋根が波形鉄板やトタンで造られていた。

水辺集落の住居の柱は、礎石を用いず地面に穴を掘って埋め込む掘立柱であり基礎構造部材を地中深くまで打設する。また、床下の柱には、根太を通すための穴が空けられており、その穴を通して、床の根太が入っている。その根太の支えとして横材の大引きがある。この部材の上に直接板を敷き詰めて、床面をつくり出している。

4.2 平面構成

4.2.1 床上

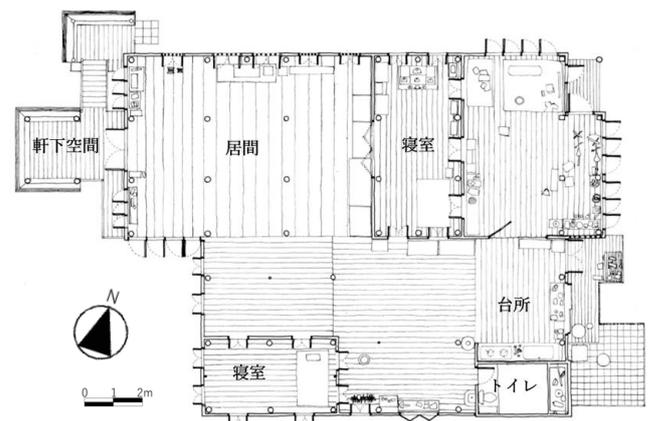


図2 2階平面図

伝統的住居の間取りにはいくつかの共通点があり、ここでは、一般的な間取りを説明する。外付けの階段を上るとまず初めに、軒下の空間がある。軒下の空間を介して屋内に入ると、居間、寝室、台所、トイレがある。

4.2.2 床下

調査地における高床式住居の一階部分に、壁はない。この空間は、大きく分けて、物置、接客、くつろぎの3つ

の役割から成る。

調査した全住居に共通して見られるモノは、船、水瓶、ハンモック、そして木や竹で作られている台である。床下空間は、船や水瓶を置く場所でもある。水瓶には、蓋がされており、雨期に降る雨水が溜まっている。船は、木の板やブロックの上に、上向きに置かれているものもあれば、下向きに置かれているものもある。

調査した5軒のうち3軒が床下を接客空間としても利用している。室内に入らずに外の空間で会話できるため、住居の敷地内とはいえ、入りやすい空間である。接客空間は、村人同士の社会的関係をつくり出す大切な空間である。

調査の中で、家人が、床下のハンモックや台を利用してくつろぐ姿がみられた。日中は、雨期・乾期関係なく床下で過ごすことが多く、暗くなったら床下を離れる。雨期の場合も乾期と同じように過ごすため、床上で一日過ごすのは、運河が氾濫したときだけである。

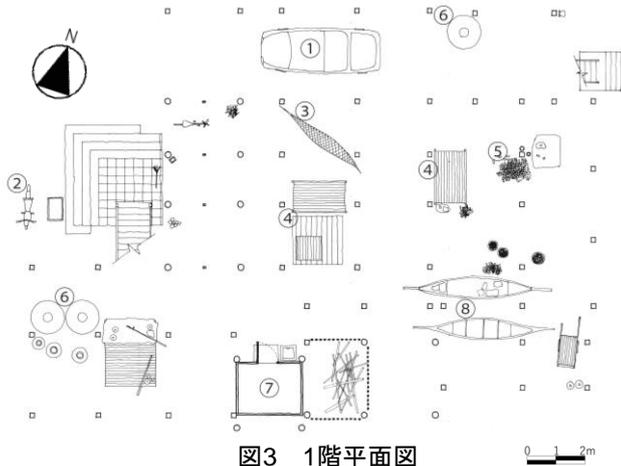


図3 1階平面図

- ①車 ②バイク ③ハンモック ④台
- ⑤生業の串の材料である竹 ⑥水瓶 ⑦トイレ ⑧船

4.3 断面構成

4.3.1 床上

空間の分け方が特徴的であり、壁やモノで分けるのではなく、段差で部屋を分けている。そのため、壁が無くても部屋名が変わる。

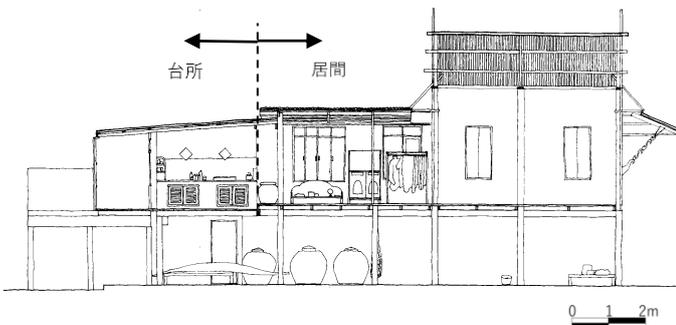


図4 断面図

4.3.2 床下

雨期に起こる運河の氾濫から家を守るための高床の床

下柱の長さは、家によって異なる。増改築で、柱の長さを変えている家も存在した。

表1 各住居の柱の長さ

住居番号	01	02	03	04	05
柱の長さ	2.4m	2.7m	2.3m	2.8m	2.95m

5. 運河の氾濫への対応

水辺集落において、再帰性と再生が可能になる要素を、氾濫への対応から明らかにするために、インタビュー調査で聞き取った人々の語りをもとに分析を行う。

5.1 運河の氾濫に対する事前準備

運河が氾濫する前に行うこととして、船の準備や床下のモノを移動させる対処が、調査した全住居で共通した。

船は、洪水が起きたらすぐに使えるようにするために、壊れている箇所を直すことや、船に防水薬を塗ることが主な作業である。洪水時は車が使えなくなり、船が唯一の交通手段であるため、欠かせない作業である。

床下を生活の一部として利用しているため、モノがたくさんある。氾濫が起こる前にそれらを移動させる必要があり、床上に上げる、または親戚の家に預かってもらう。そして、モノを運ぶ際、家族だけで行っているのではなく、近隣住民と共に行うことが多い。

水瓶は、流されないように工夫して、床下に置かれている。水瓶に溜まった水を飲料水としているため、重要である。

5.2 毎年起こる運河の氾濫

毎年起こる運河の氾濫は、年によって異なるが、約30cm~100cmの水位で、約1週間続き、それが雨期の間6回ほど繰り返される。

5.2.1 氾濫時の対応

氾濫時は、床下では過ごせないため、住居にいるときは床上で生活をするが、生活は、氾濫前とほとんど変わらない。交通手段が、車やバイクから、船に変わるだけである。

また、調査した全住居で、氾濫中でも外出すると答えている。船を使用し、買い物や近隣住民に会いに行くこともあれば、托鉢で外に出るため、毎日家族以外の人とも関わっている。

5.2.2 氾濫後の対応

氾濫後に行うこととして、氾濫前に移動させた床下のモノを戻すことが全ての住居に共通している。そして、氾濫前と同様に、近隣住民や親戚が協力して行っている。

5.3 2011年の大洪水

2011年の大洪水では、3mを超える水位で、3ヵ月以上続いた。床上浸水した住居もあった。最初の20日間は、どこからの支援もない中で生活だった。20日目以降は、村人のために、政府や民間からの支援が開始され、インスタントラーメン、米、醤油などの食品や生活用品が寄

付された。また、ガスは問題なかったが、電気が3ヵ月間止まっていた。

5.3.1 洪水時の対応

床上浸水した住居では、床下に置かれていた大きな台や他の家具を床に置くこと、また、窓から窓に板渡しをして、その上で生活し、板の下には、ブロックやイスを置き、安定させるなど、住居にあるモノを利用する工夫が見られた。そして、その応急処置は、近隣住民の協力によって行われた。

洪水が始まって最初の20日間は、援助をしてくれる機関がなく、船を使い自力に必要なモノを揃えており、足りないものを近隣住民同士で分け合っていた。

5.3.2 洪水後の対応

床上のモノを床下に片付ける際、近隣住民が協力してくれることが多かった。

K村では、床上浸水した家では、次の洪水に備えて、洪水後に床を上げていた。住居の改修は、同じ村に住む大工に依頼している。床を上げたことにより、2017年に起きた大きな洪水では、床上浸水を回避できた。

P村では、この洪水を機に政府が、水門を閉じるという対応をとり、運河の氾濫が起こらなくなった。この結果、氾濫は起こらなくなったが、柱が乾燥したため住居ではシロアリが出るようになった。その他、生業であった稲作を行う村人が減り、バンコクに働きに行くようになった。その結果、住居は空き家が増加した。

6. 再帰性・再生

本研究の分析より、氾濫前から氾濫後にかけて、環境に応じて物的関係と社会的関係による対応がみられた。毎年起こる運河の氾濫の分析から、再帰性について述べ、2011年の大洪水の分析から、再生について述べる。

6.1 再帰性

氾濫が起きた後も、交通手段や住居にいる際に過ごす場所以外は、何も変わらない中で生活する。調査した全ての住居で、氾濫直前から氾濫後にかけて行うことが共通しているため、それら物的関係と社会的関係は、定式化されていると言える。氾濫後に氾濫前の日常に再び戻ることを可能にするには、その土地の定式を維持しなければならない。

氾濫は年次繰り返されるものであり、非日常的事態に違いないが、通時的にみれば日常のサイクルに組み込まれている。そのため、物的・社会的対応を予測することができ、再帰につながる。

6.2 再生

再生とは、災害前と全く同じ状態に戻すのではなく、日常の生活に戻るとともに、次の洪水に対応できるような住居に変化を加えることだと言える。2011年の大洪水は、洪水時や洪水後に行った作業に必ず近隣住民との助け合

いが存在した。予期しない洪水が起こった際に、人と人が協力し合い、そこでの生活を可能にするための対応が素早く行われた。毎年起こる氾濫の際に存在していた助け合いが、2011年の大洪水の際に発揮されたと言える。

K村とP村で、洪水後の対応が異なったため、それぞれの方法を考察する。

K村では、床の高さを上げる対応がとられた。床上げの結果、2017年に起きた大洪水では、床上浸水を回避することができたことから、2011年の再生は成功したと言える。

P村では、政府によって水門を閉じるという大きな対応がとられた。これも、元の日常に戻すとともに、次の洪水に備えて行われたことである。しかしその結果、村に変化をもたらす原因となった。また、運河の氾濫が起こらなくなったことで、助け合いが失われてしまった。それは、近隣住民とのかかわりの減少につながった。日常から近隣住民とのかかわりがあるが、それ以上に、氾濫での助け合いが、村人同士の関係を深くするものであるため、運河はコミュニティを維持させる1つの要素であると言える。

7. おわりに

本研究の分析により、何らかの作業が行われるごとに人と人が接触していることがわかった。物的関係と社会的関係がうまく交差することによって、文化的復元力が生まれ、運河との共存が可能になるのではないだろうか。

文化的復元力とは、再帰性と再生から成り立つと考ええる。再帰性をもたらす定式化が存在することで、再生が可能になり、そこには必ず、物的関係と社会的関係が存在すると言える。

本研究では、氾濫原に暮らすことによって水との関りの中で、水に親和した文化を発展させ、日常的な社会関係を創出してきた水域の文化的復元力の実際を明らかにすることができた。

参考文献

1. 前田昌弘：「津波被災と再定住 コミュニティのレジリエンスを支える」，京都大学学術出版社，2016
2. 法政大学大学院エコ地域デザイン研究所アジアまち居住研究会：「チャオプラヤー川流域の都市と住宅」，法政大学大学院エコ地域デザイン研究所アジアまち居住研究会編集，1998-2003
3. 中村茂樹 石田卓矢：「アジアの水辺空間」，鹿島出版会，1999
4. 東日本大震災合同調査報告書編集委員会：「東日本大震災合同調査報告」，丸善出版株式会社，2017
5. 綾部恒雄 石井米雄：「もっと知りタイ第2版」，弘文堂，1995
6. Poon Khwansuwan：「Adaptation and Spatial Resilience of Amphibious Settlements in the Flood Plain of Thailand」，2014